

【卒業制作で伝えたいメッセージ】

私は、22年間の学生生活を終え、社会人へと肩書きが変わる今だからこそ、自分自身を表す「名前」をモチーフに自分を失わず前へ進もうとする主人公の物語を制作しました。

この作品で私がテーマとしているのは、もちろん「名前＝自分自身」ですが、それと同じくらい描きたかったのが、権力が一箇所に集中する社会構造への警鐘です。

水鏡の国では、教会に権力が集中し、教皇によって「国民が平等に魔法を扱える社会」が築かれています。それは確かに平等で、国としては効率的な仕組みですが、その代償として、人々は「自分自身」を失っていきます。

このシステムは一見すると「正しい・平等・効率的」という顔をしていますが、実際には

疑問を持つこと＝未熟・問題児

声を上げること＝秩序を乱す行為

として扱われます。

その結果、声をあげた者は周囲から排斥されてしまうのです。

だから人々は、名前(自分)を捨て、この仕組みが正しいのだと考えることをやめ、静かに従ってしまう。

私は、この社会構造は国家規模でなくても成立しうると思っています。現に、私たちが日常的に属しているコミュニティや学校、会社などでも、「権力」「決定権」「空気」を握った瞬間に、小さな「水鏡の国」は生まれます。

ここで重要なのは、「声をあげるもの排斥しようとする社会」という点です。

排斥とは、必ずしも「追い出すこと」や「罰を与えること」だけを指しません。「面倒な人」「頑固」「扱いづらい」といったレッテル貼りだけでも十分なのです。そうした固定観念が一つの場所に根付くだけで、周囲は無意識に同調し、一人の人間を同じ目で見るようになります。そして当事者だけが、静かに消耗していく。

だからこそ私は、今まさにそういった社会に押しつぶされそうになっているあなたに向けて、「そのしんどさは無駄じゃない」「被害妄想でもない」そして、「この構造に潰される自分」になってほしくないという願いを込めて、この物語を作りました。

あなたが発した言葉や感情、物語は、今は自分に見えなくても、必ず誰かに届いています。

憧れは、連鎖するのです。

物語の中で一度は周囲に押しつぶされ、飲み込まれたミリアは、巡り巡って、彼女に憧れを抱いた少年の存在によって、自分の名前を取り戻しました。

私は、自分の心や気持ちを、声として失わずに届けたい。

そして、同じように声を持ち続けようとする皆さんを応援したい。

どれだけ大きな力に潰されそうになっても、

あなたの声は、確かに届いている。

どうか、切に、届け。

この声も、この気持ちも、そしてあなたの声も。

どうか、あなたがあなたでありますように。

『ミリアと水鏡の国』

・子供の頭の上には金色で綴られた名前がルーン文字で見える。

この名前は、「記憶・個性(魔法)・心」を司っており、失うと自分自身を忘れて抜け殻になってしまう。

【登場人物設定】

○ミリア ミリタ

主人公。

ネアとは双子の姉妹でミリアは妹。

得意魔法:草、名前の魔法:歌を歌うことで植物を芽吹かせ、傷を癒す。

娯楽を禁じられている国のために、森でこっそり動物たちに歌を披露している。

辛い時はいつも森の秘密基地へ行き、孤児院で見られたくないテストや大切な物、交換日記などを隠している。

今年の8月8日で10歳。(↑リミトトトトト:トヴィーマヌス)

大人になる儀式を目前に控えている。

素直で誠実、好奇心旺盛。

この国の方針に疑問を持っている芯のある少女。

名前の語源

・由来:ラテン語の「miracle(奇跡)」

・意味:小さな奇跡を起こす者／変革の種を持つ者

○ネア ミリ

ミリアとは双子の姉妹でネアは姉。

得意魔法:炎、名前の魔法:1度見た(読んだ)ものを忘れない。

考古学者になることが夢で、ミリアと一緒に大人になら世界を見ようと約束していた。

司祭からは、儀式を行うことで一生魔法を使えるようになるとしか教わっておらず、記憶が消え別人格になるとは思っていなかった。

孤児院でミリアと会わせて貰えないため、森の秘密基地を共有し、よくそこで一緒に遊んでいた。

優しく、穏やかな性格。ミリアだけが唯一の家族だと思っており、とても大切にしている。

名前の語源

・由来:境目・間(あわい)を意味する古語

・意味:子供と大人の境界/名前を持つ者と失う者の境界

ネア=先に境界を越えし者。

○アルク リク

名前を持つ大人の男性魔法使い。

得意魔法:風、名前の魔法:個性魔法をブーストする。

吟遊詩人であり、旅人。

この国では、水鏡の儀式を行わないものは神に逆らったと見なされ処刑されるため、名前を持つ大人は非常に珍しい。

本来儀式の時間なのに、森で魔法を使うミリアを見て姿を現す。
ミリアに別の道があることを教えてくれる存在。
昔の自分と同じように悩むミリアに自分を重ね、手を貸したくなつた。おまじないとして、感情が
昂つた時にブーストする魔法をかける。
その日は水鏡の国のレジスタンスに会うためお忍びで国へ来ていた。(名前を持たない大人に見
つかると捕まってしまうため、お忍びで来ている。)

フラフラした優男。人たらし。意外とどこへ行っても上手くやりそうなタイプ。
風魔法の使い手で簫にのって飛ぶと誰よりも早い。

名前の語源

由来:「Arc=弧(虹)」「Arcane=秘された力」「Arcadia=理想郷」
・意味:虹の橋／希望の導き
ミリアへ希望を導く橋渡しとなる存在

○ティアン ↑↑↑

ミリアに勇気と希望を貰つた金髪の少年。
ミリアと同じようにこの国の在り方に疑問を抱いていたが、その感情は禁忌であるため隠してき
た。しかし、彼女の演説と暴走を前にしてハッさせられる。
ミリアの想いが詰まったカリフォルニアポピー(ハナビシ草)に勇気をもらい、あの日以降毎日持ち
歩く。
彼もこの国を変えたいと思っている一人。

憶病で真面目。周囲に合わせることが得意。
自分の声を押し殺して生きてきた少年。

名前の語源

ティアン=「空・天」の語感:未来への種

○大教皇

水鏡システムを作った張本人。
大人になればなるほど、魔力はどんどん失われ消えていく。自分が父親だった頃に愛する娘を
災害で亡くし、あの時自分に魔法が使えていたら救えていたのにと絶望した。(その時助けようと
片腕を伸ばし、失う。)
それならば子供の魔法を大人へ等しく分配することで正しく使い、この国を支えんと奮闘した。
能力も才能も全て平等であることの弊害として子供の頃の記憶は消え、水鏡を通ると抜け殻に
近い新たな人格が形成されてしまう。
機械人形のようになってしまった大人たちには仕方ないと目を瞑りつつ、これが正解だと思って
疑わない。

水鏡システムを作った時から不老不死の存在に。

○司祭たち

魔法学校の先生も務める。大教皇の手足たち。

その思想は大教皇よりも強く、子供は何もできなくて当たり前、大人になることが全てを救う。正義だと信じて疑わない狂信者たち。
水鏡はいわば彼らの神。

○子供たち

子供から大人になることは素晴らしいと思っている。早く大人になり、名前を捨て、自我を捨て、新しい人格で働きたいと切望している。
大教皇や司祭が絶対的な母であり、その教えに従わない子供は差別し軽蔑する。
できないことの全ては自分が子供という存在であるからと認識しており、大人になって万能になりたいという考えが全員にある。
「努力」という言葉を知らないし、水鏡を通れば全て解決すると思っている。
この世界に洗脳されているのかもしれない。

-
- ・ ミリア(奇跡の種)＝芽吹く者。名を失っても、心で世界に光を灯す主人公。
 - ・ アルク(虹の橋)＝希望を導く旅人。彼女の自由を揺さぶる風の象徴。
 - ・ ティアン(空の種)＝未来へバトンを継ぐ少年。変化の火種。
 - ・ 大教皇・司祭たち＝「平等」の名のもとに個性を抑え込む体制の象徴。
 - ・ 子供たち＝「選択する自由」を知らない純粋な信仰者たち。
-

【ミリアとネアの出生について】

ミリアとネアは赤毛の双子姉妹。

水鏡の国では、赤毛の髪は血を象徴する色＝その年に争いをもたらす種として、忌み嫌われてきた。

国養樹から生まれた彼女らの両親に選ばれた大人は、本来彼女らを育てる義務があったが彼らは周りの目に耐えきれず姉妹を森に捨てた。

森では、水鏡システムから逃げた名前持ちの大人が彼らを見つけて5歳まで育てた。しかし、その大人はミリアたちが5歳の誕生日を迎えた時に存在がバレ、強制連行されてしまったのだ。その後ミリア、ネアは孤児院に預けられ一般的な指導(洗脳)を受けることになるが、最初の5年間で読み聞かせてもらった夢や個性、世界のお話はミリアとネアに大きな影響を与えている。

ネアもこの世界に疑問を持っているが、水鏡を通ると記憶や夢まで消えるとは知らない。

頭の上にある名前だけが消えると思っている。

ミリアは記憶が無くなるかもしれないことを危惧しているが、ネアは大丈夫だと言う。

不安なミリアは孤児院の頃からずっと交換日記をつけてきた。

孤児院に移る際、名前持ちの大人の記憶は司祭に消されているため、思い出せない。

しかし、この世界への疑問と世界への憧れは彼女たちに残り続けた。

【メイン楽曲『ミリアと水鏡の国』歌詞】

作詞・作曲・歌: ゆうり(from yuli Audio Craft)
架空言語作詞: 青々とした。

あの日かわした約束は
影に沈み ほどけてく
水鏡はあなたの顔
塗り潰して消し去った

夢の灯も許されず
大人へ移ろうのなら
彷徨う足 どこへ行くの
何も分からないままで

「私は私でいたい」と命が叫ぶ
祈って 歌うよ 自由を求めているの

Oria ven silen. → ꝝꝝ|ꝝ ꝝꝝ|ꝝ|ꝝꝝ → 「祈りよ、静けさに来て」
私は自分を
Vian sel iren. → ꝝ|ꝝ|ꝝ ꝝꝝ|ꝝꝝ → 「息／芽を、核(コア、魂)に結べ」
捨てたくないの
Weyra ar Ithra. → ꝝꝝꝝꝝ|ꝝꝝ|ꝝꝝ → 「風の路へ、門へ」
誰かに届け 遠く果ての先まで

Aera, friala. → ꝝꝝꝝ|ꝝ|ꝝꝝ → 「空よ、自由よ」
空を舞うように
Valen, friala. → ꝝꝝꝝ|ꝝ|ꝝꝝ → 「大地よ、自由よ」
野を駆けるように
Oria lóshain. → ꝝꝝ|ꝝ|ꝝꝝ|ꝝ → 「光の祈り」
魔法の言葉よ
この祈りを紡いで

Oria=祈り／祈りのことば
ven=来い／至れ
silen=静けさ
Vian=息・芽(生命の始まりの比喩)
sel=結ぶ
iren=核(コア、魂)
Weyra=風の路(風が通る道)
ar=～へ(方向を表す前置)
Ithra=門・闕(しきい)
Aera=空
Valen=大地
friala=自由
lóshain=癒しの光

閉ざされた世界ではないと
ある人は教えてくれた
自分の手で掴んだ自由
私にもできるのなら

名を失わずに生きること
自分の足で立つこと
眩い光 射抜かれ
希望を抱いてしまった

運命の朝 目覚める水鏡
声をあげるの 私の言葉で

Grath murn! → グラス ムン → 「静寂を碎け！」
私は自分を
Breg davel! → ブレグ ダベル → 「枷よ、ほどけ！」
捨てたくないの
Zorn dravan! → ゾルン ドラバーン → 「境よ、開け放て！」
誰かに届け 遠く果ての先まで

grath: 碎く／碎け(命令)
murn: 静寂・じじま
breg: 枷・拘束具
davel: ほどける／解く(命令)
zorn: 境・闘(いき)
dravan: 開け放つ(命令)

この記憶も この声も
永遠(とわ)に強く抱きしめて
どうか貴方に届いてよ
自分の道を切り開く

Áurea—Suvárea → オレア—スバレア → 「黎光を燃り合わせて」

Órea—Áemoria → オレア—アエモリア → 「祈りよ——記憶の苑へ」

Áurea: 黎光の縁(ふち)
Suvárea: 光を燃り合わせること／その質
Órea: 祈り(祈りの息)
Áemoria: 記憶の苑(象徴的な記憶の場)」

——「届いて」
